

当院で1989年から1991年までの過去3年間に切除された膵癌は13例であった。内訳は膵頭部癌7例、膵体尾部癌3例、嚢胞腺癌2例、粘液産生膵癌1例であった。通常の腺管癌に限った切除率は40%、うち治癒切除は30%に行われたに過ぎず、早期発見の重要性が認識された。

症例として、画像診断上は慢性膵炎とされたが、癌を否定できないため手術、治癒切除できた74歳女性の体部小膵癌の症例と小膵癌との鑑別が困難であった58歳男性の膵体部の限局性脂肪変性の症例を呈示し、小膵癌の診断が容易でない現状では、疑わしきは切除する姿勢が重要なことを強調した。

37. 当院における膵切除例の検討

(都立豊島病院外科, 東京女子医大消化器外科*)

長谷川正治・済陽 高穂・山口 峰生・
上原 健一・小川 一平・佐藤 正典・
片田 雅孝・神尾 重則・竹入 正彦・
黒木 尚・江口 礼紀*

最近5年間の膵切除症例の現況と最近、膵尾部に発生した副腎外傍神経節腫の1切除例を経験したので合わせて報告する。1987年1月より1991年12月までの膵胆道系手術総数は391例で、このうち膵切除症例数は24例(悪性疾患は15例)であった。PDは20例に施行し、胆嚢癌の膵切除5例はすべてHPDで、PPPDは良性胆管狭窄の1例に施行した。DPは良性疾患の2例のみで、悪性疾患はなかった。提示症例は58歳、女性、腹部超音波検査にて膵尾部に手拳大の腫瘤を指摘され入院。画像診断およびエコー下組織生検にてsolid and cystic tumorが疑われ、膵体尾部切除術を施行。術後の病理組織学的検索で後腹膜原発の副腎外傍神経節腫と診断した。

38. 当科におけるTAE症例の検討

(至誠会第二病院消化器内科,

東京女子医大消化器放射線科*)

細見 麻子・足立ヒトミ・杉本千賀子・
鈴木 義之・黒川きみえ・磯部 義憲*

今回我々は当科において過去3年間に肝細胞癌に対してTAEを施行した症例17例を対象としその効果について検討を加え、TAE後抗癌剤間欠動注療法により良好な経過を辿っている症例を経験したので報告する。対象は1989年から1991年迄にTAEを施行した17症例で、内15例はhypervascularな腫瘍を呈していたが、従来TAEによる効果があまり期待できなかったhypovascularな腫瘍に対しTAE後動注療法を行い

良好な結果を得た。症例は43歳男性。ICG₁₅ 73.1%のためTAE施行し、S₈の腫瘍にはlipiodolの集積を認め、S₈の集積を認めない腫瘍に対し持続動注用カテテル設置リザーバー設置を行いMMC 4mg、5-FU 500 mgを1週間毎に計8回動注しAFP、PIVKA-IIは正常範囲まで低下し腫瘍径の縮小を認めた。

39. Portal Hemodynamic Changes Evaluated by Intraoperative Color Doppler Imaging

(Institute of Gastroenterology,

Tokyo Women's Medical College)

Rozalinda POPOVA・Akiko SAITO・
Yuko OKADA・Tetsuo NAKAGAMI・
Mariko MORIYA・Yoko ANDO・
Ken TAKASAKI・Hiroshi OBATA・
Seiichiro KOBAYASHI

Hemodynamic changes were evaluated by measuring portal flow velocity, portal flow volume and portal pressure in two patients who underwent partial hepatectomy. Pulsed Doppler and Color Doppler Imaging were used which is a preferred method due to the clear and rapid demonstration of the hepatic vessels. Measurements were made before and after resection including right portal vein ligation. Temporary occlusion of the right portal vein produce different portal blood flow (left portal vein) and main portal vein and portal pressure. These findings may provide information for selection of hepatectomy procedure.

40. 肝内門脈肝静脈短絡の2例

(社会保険山梨病院)

今井 史・風間 吉彦・
佐藤 公・飯田 龍一

画像診断可能なレベルの肝内門脈肝静脈短絡は稀である。今回無症状で、超音波検査により発見し超音波カラードップラー法にて確診しえた2症例を経験した。超音波検査は本症診断の契機となることが多く、拡張した門脈と肝静脈に連続する脈管に気づき本症を疑った症例では、カラードップラー法によって形態学的変化と同時に血行路の変化を合わせて観察することにより確定診断が可能である。症例1では門脈と中肝静脈の分枝の間に細かい複数の短絡路が描出され、症例2では大きな短絡路で短絡量も多く、流入した血液は短絡路の壁にあたり乱流を生じて流出していくのが明瞭に観察された。

カラードップラー法は本症のような脈管異常において診断的価値は高く今後更に検討されていくであろう。

41. 日本住血吸虫症合併肝細胞癌切除症例の検討 (社会保険山梨病院)

矢川 彰治・野方 尚・植竹 正紀・
小沢 俊総・高石 祐子・井上 雄志・
草野 佐・小俣 好作

当院での肝切除手術は年々増加しているが、約90%が悪性疾患を対象とし、とくに原発性肝癌が全体の3分の2を占めている。

甲府盆地は日本住血吸虫症(日虫症)の有病地であり、1990年6月から1年7カ月間のHCC切除例35例中14例40%に日虫症を認めた。

日虫症HCCは、多結節例が多い傾向を示したが、Edmondson分類、腫瘍マーカーでは、とくに特徴を認めなかった。

また、HBsAg陽性例はなく、HCVAbは85.7%と高い陽性率を示した。肝硬変合併率は35.7%ときわめて低く、肝炎後肝硬変の像を呈していた。従って、HCCの発生母地はC型慢性肝病変と思われたが、慢性経過の早い時期にHCCが発生していることから、日虫症もHCCの発生に関与していると考えられた。

42. 孤立性肝膿瘍の2例

(朝霞台中央総合病院)

椋棒 豊・村田 順・吉野 浩之・
須賀 弘泰・清水 舜一

孤立性肝膿瘍には肝腫瘍との鑑別困難例があり、今回我々は、2例の孤立性肝膿瘍を経験し、1例は超音波ガイド下膿瘍穿刺ドレナージ術、もう1例は肝右葉切除術にて治療したので報告する。

症例(1)は41歳の男性で、倦怠感と発熱を主訴に来院し、血液検査で貧血・肝機能値上昇・白血球数増加あり入院となった。腹部超音波・CT・血管造影検査にて肝膿瘍と診断した。超音波ガイド下穿刺ドレナージ術にて約1カ月後に治癒した。

症例(2)は57歳の男性で、全身倦怠感を主訴とし、膀胱炎にて治療していたが高熱が持続し入院となった。検査の結果、肝膿瘍と大腸多発癌の診断で、肝右葉切除とハルトマン手術を施行した。肝の病理組織では肝膿瘍であった。

43. 慢性肝炎のインターフェロン療法の経験

(国立横浜病院臨床研究部)

雨森 明・松島 昭三・吉田 憲司・

小松 達司・進藤 仁・林 直諒

インターフェロン単独療法を行ったB型慢性肝炎活動型15例中、インターフェロン投与開始時e抗原陽性でトランスアミナーゼ高値を示した12症例について検討した結果、2年後にseronegativeとなったもの4例(33%)、seroconversionを起こしトランスアミナーゼ正常化したもの2例(10%)であった。また、1年以上、トランスアミナーゼが正常化したものの再度e抗原陽性・トランスアミナーゼ上昇を来したものが2例認められた。以上、B型慢性肝炎の自然経過での2年間のseroconversion率16.7%、seronegative率52.8%と比してインターフェロン単独療法は有効とは言えないと結論した。

44. 肝障害を合併した多発性筋炎の1例

(谷津保健病院消化器内科)

新井 信・鳥居 信之・藤野 信之

症例は16歳、男性。4カ月前より下肢筋力低下に気づき、近医で急性肝炎を疑われて、当科に入院した。GOT 277U/l, GPT 255U/l, LDH 2,664U/l, CPK 16,841U/lと上昇し、近位筋優位の筋力低下、筋生検、筋電図と合わせ、多発性筋炎と診断した。入院後、GPT優位に上昇し、肝炎合併が疑われたため、腹腔鏡下肝生検を施行した。肉眼的には腫大した白色肝を呈し、組織学的には小葉中心性带状壊死と考えられ、GPT上昇には肝疾患が関与していた可能性もあると思われた。

多発性筋炎と肝障害の合併は稀で、本邦で27例の報告があるのみであるが、本例のごとく小葉中心性带状壊死を呈した報告は1例のみである。多発性筋炎を見た場合、肝酵素と筋酵素は重なるものが多いため、常に肝疾患の合併を念頭に置き、鑑別する必要がある。

45. 下部消化管における慢性期日本住血吸虫症の臨床的検討

(社会保険山梨病院内科、*同病理)

風間 吉彦・今井 史・佐藤 公・
前田 淳・飯田 龍一・小俣 好作*

当院における大腸癌切除例を日本住血吸虫症(以下日虫症)合併群と非合併群に分け、①日虫症の注腸造影上の特徴的所見出現頻度、②特徴的所見部位と癌の局在部位の関係、③虫卵の有無と癌の局在部位の関係、④大腸癌合併日虫症の頻度推移、について検討した。対象は、1981年から8年間に切除された大腸癌128例と1990年から2年間の92例である。うち日虫症は、38例(27%)と18例(16.7%)に認められた。結果は、①注